

教育立国日本の方

三十年以上前から国の方針として行われた学校の「ゆとり教育」は子供の生きる力、個性尊重、自由な創造を謳っていたが、その目的を達せられず、勉強しない子、本を読まない子、精神が弱い子を多産した。今軌道修正が行われつつあるが、これは教育立国日本の歴史的汚点である。

数千万の本物の金の卵が誕生

「就職列車にゆられて着いた。遠いあの夜を思い出す。上野は俺らの心の駅だ。配達帰りの自転車をとめて聞いている国なまり」

井沢八郎が昭和三十九年（一九六四）に歌った「ああ上野駅」（作詞関口義明）の二番の歌詞でこの歌は中学を出て東北から東京に出て来て工場や商店で働いていた青年たちの心をつかみ大ヒット曲となり、今も歌いつがれて国民歌謡曲になった。

昭和二十二年四月に新制中学が廃止。昭和二十四年三月には早くも卒業生が誕生。九年間の義務教育を終えて田舎に働き口のない少年は大都会へ出て行った。当初は「どこかに故郷の香りをのせて入る列車のなつかしさ。上野は俺らの心の駅だ」

これが一番の歌詞。東京に根をおろし、結婚して子どもできた東北出身の金の卵が、当時を思い出してこの歌を口ずさんだのだ。

以上を私は故郷をなつかしむセブンメンタルな気分で紹介したのではない。

「金の卵」が単に少年をおだてるための言葉ではなく本物だったということを言いたくて長い前置きをした。

九年間の義務教育を修了した少年少女。家庭でつけられ、学校で読み書き計算を勉強した人材。上司の言うことを正確に理解し、自ら仕事の工夫改善を行い、結果を上司にきちんと報告する人。

世界のどこにこのような優秀な労働者を何百万人も揃えた国があったか。

読めない書けないばかりか口ク

に話せない。態度は粗暴で働く意欲も低い。現在でも世界諸国の労働者の半数はこのレベルである。今から六十年前に日本は世界に前例のない頭がよくてしかもよく働く労働者群を擁していたのである。

昭和三十年代後半から、敗戦国日本の「奇跡の経済復興」高度成長が始まる。その要因はいろいろあげられているが、その中でも、良質の労働力の存在は重要である。時とともに、繊維などの軽工業から家電や重工業へ重点が移っていくが、どの時期も「良質の労働力」が十分にあった。

だから欧米が目を見張る高度成長の心臓部を作った。

江戸時代、各大名は藩校を作り武士の子弟を教育した。町民も塾で学び、寺子屋に資金援助して子供の教育に理解を示した。

もちろん読めない書けないの文盲は少なくなかったが、生活が貧乏しくて町民は子供に字を習わせた。世界一の教育先進国である。

正確な数字はわからないが日本人の現在の識字率は九九・八％である。これは世界最高の率である。

アジア、アフリカ、南米などの後進国は平均六〇％、欧米諸国でも九九・八％に並ぶ国はない。

三百年前の江戸時代、日本の識字率は五〇％を超えていたであろう。他国は貴族や富有層などほん

の一握りの人おそらく二〇〜三

経営管理講座 295 染谷和巳

では使いものにならなかつたはずである。この「教育重視」の姿勢は明治以降も一貫している。

左の書は六月号の「国破れて教育あり」を読んだ大学の先輩、福岡経営労務事務所の福岡一雄氏が「参考までに」と送ってきてくれたものである。

日本柔道の祖であり長く東京高等師範学校の校長を務めた嘉納治五郎の書である。

写真のコピーで読みづらいが「教育のこと、天下これより偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育遠く百世に及べり」と書かれている。

世の中で最も偉大な課題は教育である。上に立つ人が情熱を持って真剣に教えれば万人を感化する。今、目の前にいる人を変化成長させれば、次の世代の人にもよい影響を与え、教育の効果は百世にまで及ぶ、の意味。

「進平齋」という雅号の治五郎が、おそらく高等師範の教師や学生のために書いたものだろう。現在「嘉納治五郎先生書」(一世化育)という題で筑波大学に所蔵されている。

この「教育のこと、天下これより偉なるはなし」の精神が昭和の敗戦の後まで受け継がれ、義務教育三年延長に結実した。

先生を友だちにしたゆとり教育

アメリカの第四十代大統領ロナルド・レーガン(一九八一年から在任八年間)は経済復興の鍵は「教育」が握っていると見ていた。

麻薬と暴力とセックスで崩壊している学校教育を建て直すため、「日本を見習え」と数回に渡り教育使節団を送った。

日本の学校には教えることに使命感を持った厳しくあたたかい教師陣がいた。生徒から尊敬され畏怖される先生がいた。友だちになつて生徒になめられているアメリカの教師が失っているものを持っている先生がいた。

レーガンは自由でのびのびの個性尊重の路線を一八〇度変えた。規律を重視し、教師の言うことを聞かない生徒は退学させ、矯正スクールで態度行動を改めるまで

教室に戻さない法律を作った。レーガンが日本の学校教育を手本に改革をすすめたちよど同じ時期の昭和五十七年(一九八二)から、文部省の課長クラスと日教組を主力に「ゆとり教育」がはじまった。

子供に負担をかけないよう授業時間を短くし教える内容を軽薄にし、「自ら体験し自ら考える自主性のある子供」を作る方針を具体化した。

経済大国になった気のゆるみか、国民はこの教育軽視の方針を強く反発することなく受け入れた。嘉納治五郎も南原繁も日高第一郎も、土曜を全休にし教科書をペラペラに薄くした学校を見たら怒りそして泣いたろう。教育立国日本の「国」もまた泣いていた。

「天下これより偉なるはなし」

教育之事天下を偉する人徳教
廣加美人一世化育遠く百世